

# 梶山季之の「族譜」論\*

—作品内の人物描写を中心に—

崔 俊 鎬\*\*

(e-mail: junhochoe@jbnu.ac.kr)

## 【Abstract】

Toshiyuki Kajiyama was born and raised in colonial Chosun as a second generation under colonization. He started creating his work after he returned to Hiroshima postwar, and this led him to publish “The Clan Records” set during colonial Korea criticizing the reformation policy of names to Japanese names led by the Japanese Government General of Korea.

Various kinds of people appear in “The Clan Records” based on colonial Chosun. In this thesis, they are classified as soldiers withholding military force in colonial Chosun, administration governing by the Japanese bureaucrats, and the colonized people of Chosun, and “I” with overall perspective in the story. Analysis of the text in each category first, emphasizes the injustice of Chosun colonization by describing Japanese soldiers and bureaucrats with criticism. Second, emphasis is made on the resistant colonized people of Chosun by describing them as active and not only suffering persecution from the reformation policy of names to Japanese names. Lastly, Japanese who discriminated and despised the people of Chosun and speculated knowing the injustice of colonization are depicted in the description of “I.”

Judging from an overall perspective, it can be interpreted that throughout the entire plot, Toshiyuki Kajiyama wanted to depict how he would have acted if

---

1) 本稿は公益財団法人住友財団の2013年度「アジア諸国における日本関連研究助成」の支援によるものである。

2) 全北大学校 助教授 日本近現代文学

he were in the same situation as the protagonist. In other words, the author is overlapping his ideality of colonizer Japanese by leaving in another virtuous Japanese over the binomial oppositional structure between the bad Japanese and the poor people of Chosun.

**key words** : Toshiyuki Kajiyama(梶山季之),  
Second generation under colonization(植民二世),  
Character description(人物描写), Perception of colonization(植民地認識),  
Reformation policy of names to Japanese names(創氏改名)

## 1. はじめに

2015年は韓日両国において歴史的な節目となる年である。韓国においては長年に渡って苦しめられた日本の植民地支配から解放されてから70年となり、日本においては帝国主義による侵略戦争と植民地支配に終止符が打たれてから70年となる。その間、韓日両国の間には国交正常化や経済協力など多方面において交流が行われてきた。しかし、周知のとおりそれらはいわゆる実利主義という大義名分のもとで、韓日両国は‘過去’から眼をそらした。結局、棚に上げて先延ばしにしていた‘過去’は、歴史教科書問題や従軍慰安婦問題などと共に、21世紀において再び我々の眼の前に現前している。その‘過去’について植民者という自分の立場と体験をもとに、植民地朝鮮および韓国社会を眼差し続けた作家の一人が梶山季之である。そして、2015年は彼が取材先の香港で急死してから40年となる節目の年でもある。梶山季之は生前発表した多くの大衆小説や週刊誌のトップ記事などから、ありふれた流行作家として扱われることが多いが、実はいわゆる引揚派あるいは動員派<sup>1)</sup>として近代日本文学史に名を残している。1930年1月に植民地朝鮮の京城に生まれた彼は、京城中学校に在学中の1945年8月15日の敗戦を契機に16年間の朝鮮生活を終えて、内地日本の原爆投下の地である広島に引揚げる。<sup>2)</sup>以後、1952年自らも創刊に携わった文芸誌『広島文学』5月号に、植民地朝鮮をテーマにした初めての作品である「族譜」を発表する。<sup>3)</sup>この「族譜」を皮切りに、翌年5月には同じく植民地朝鮮を舞台にしたロマンス小説である「霓のなか」を、1958年3月には自らの敗戦の体験に取材した「性欲のある風景」を、1963年9月には敗戦後の京城を舞台に内地日本に引揚げようとする日本人植民者の群像を描いた「闇船」などを次々と発表していく。中でも1963年3月に発表された「李朝残影」は日本よりも先に韓国で映画化されることとなり、このため梶山季之は韓日基本条約が調印されるよりも前の1965年2月に夫人同伴で韓国を訪問している。<sup>4)</sup>このように終生、過去の朝鮮と現在の韓国に対する関心は衰えることがなかった。本稿では、前述したように梶山季之が残した一連の朝鮮小説の中でその出発点ともいえる「族譜」を取り上げ、主に作品内における人物描写を分析し、その内容を提示すると共に特徴をも明らかにしたい。

- 
- 1) 坂田稔 (1998) によると戦後の日本文学において作家たちを、敗戦を迎えた時の年齢によって応召派・出陣派・動員派と分類することができ、梶山季之は野坂昭如、前田武彦、五木寛之らと共に動員派に該当するとされる。
  - 2) 梶山季之の生涯とその発表作品については梶山美那江編 (1998) 「仕事の年譜・年譜の行間」に詳しい。
  - 3) 「族譜」は以後、数回の改稿を経て最終的には作家の死後刊行された講談社文庫版『李朝残影』に決定稿として収録される。したがって、本稿ではこの講談社文庫版の「族譜」を底本とする。
  - 4) 梶山季之の韓国訪問はこれが2度目であり、1963年11月25日にジャーナリストでありノンフィクション作家としても有名な大宅壮一と共に戦後初めて生まれ故郷である京城(ソウル)の地を踏むこととなる。

## 2. 「族譜」の先行研究

そもそも韓国において梶山季之のようないわゆる植民二世作家に対する関心は、管見の限りにおいては2000年代に入ってから目立つようになったと思われる。長年の植民地統治によって朝鮮半島と内地日本には多くの人々が行き来して定住することとなるのだが、歴史・社会・文学など多くの植民地関連の研究分野において、早くから関心の対象となった在日朝鮮人と比べ、それと不可分の関係にある在朝日本人に対する関心は薄かった。しかし、2000年代に入ってから次第にこの在朝日本人に対する学術および社会的な関心が高潮し、あらゆる分野で関連研究が行われ、ひいては近代日本文学における植民二世作家たちに対する新たな視座が開かれるようになった。一方、日本においても1980年代頃までこれら植民二世作家に対する関心は比較的薄いものであった。戦前の帝国日本の植民地支配に伴って形成された、いわゆる植民地文学の末端に彼らの作品がおかれるくらいに過ぎなかった。近年にはこの植民二世作家たちに特化した学術研究書なども出されるようになってきているものの、いずれにせよ本稿で取り上げる梶山季之と「族譜」に関する先行研究は以上の状況と相まって充実しているとはいいがたい。それでは「族譜」あるいは梶山季之の朝鮮小説に関する代表的な先行論をいくつか確認してみよう。まず、カン・ジング（2006）は「族譜」「李朝残影」「閩船」など、梶山季之のいくつもの朝鮮小説を分析した上で、彼は帝国日本の植民地朝鮮に対する強制占領政策に批判的であると共に、朝鮮の伝統文化に対して友好的であると述べる。しかし、彼の作品の中には植民地を眼差す帝国の視線が潜在していると批判する。その帝国の視線とは、まず前近代的な風景描写を通して朝鮮を原始的で野蛮な空間として具現化し、また原体験の空間として表象している点。次に保護者としての日本人と被保護者としての朝鮮人という構図を通して、宗主国と植民地の間に横たわる多様な葛藤を男女間の問題に摩り替えている点。そして植民地支配の主体である植民一世を責めることで植民地支配の責任逃れを試みている点などを指摘する。次にパク・ジェホン、キム・スンジョン（2009）は梶山季之の「族譜」と在日作家である金達寿の同名タイトルの作品「族譜」とを比較分析している。まず、梶山の「族譜」は日本人作家として帝国日本の創氏改名政策に対して比較的批判的な態度を示している点を高く評価する一方で、主人公の消極的な行動と個人の限界性、そして族譜の象徴性を深く理解しておらず、作品の内容がエピソードレベルに留まっている点を指摘している。また、金達寿の「族譜」が政治的な背景を排除した上で、出来るだけ率直な姿勢で事実を描いているのに対して、梶山季之の「族譜」は直接的な体験ではなく新聞や伝言などを参考にして書かれた作品であるため、政治的な傾向が強いと主張する。たとえば、作品の結末において族譜を京城帝国大学に寄贈することで物語が締めくられるのは、もっとも政治的な描写の一種だと批判している。最後に川村湊（2002）は、まず梶山

季之には生涯の作家としてのテーマが三つあり、それは朝鮮・ヒロシマ・移民であったと前提した上で、一連の朝鮮小説はその一翼を担っていると述べる。また、梶山季之を植民地生まれの引揚げ体験をもつ、いわゆる引揚派と規定し、故郷喪失と故国崩壊による甚大な虚脱感と崩壊感覚の持ち主だと主張する。そして、植民地生まれで、植民地政府に勤める父を持つ者として、梶山季之は植民地責任に対する贖罪意識をもっており、それが植民地朝鮮を描いた「族譜」や「李朝残影」の内在的テーマとなっていると指摘する。

以上、梶山季之の「族譜」に関連する先行研究を確認してみた。先行研究において作品「族譜」は作家の政治性と責任逃れ、そして贖罪意識などの異なったキーワードで読み解かれており、共通点としては作家である梶山季之が生涯のテーマとして朝鮮にこだわっていたことと、過去の帝国日本による植民地朝鮮の支配に対して非常に批判的な態度を取っていたことである。それではこれらの先行論を踏まえた上で、作品内の人物描写を分析して「族譜」が持つ特異点とその意味を探ってみたい。

### 3. 「族譜」における人物描写

#### 3.1 植民地朝鮮の軍人と軍隊

作品の冒頭において主人公（「僕＝谷六郎」）は徴用逃れの卑怯な気持ちの中、京畿道庁の総力第一課に勤務している。徴兵検査の結果、第二乙と判定された主人公は銃弾が飛び交う戦場へと連れ去られる可能性は低かったものの、総力戦においてあまり役に立たない画家という職業のせいで、戦局の悪化と共に強制徴用される恐れは充分あった。実際、主人公は以前勤労奉仕という名目で10日間朝鮮神宮のある南山で高射砲陣地の構築に動員された経験を持つ。1940年8月初旬、特に蒸し暑かったその年の夏に、平素から体力に自信の持てなかった主人公は、他の中学生たちや見た目にも力仕事には向いてない色白の青年たちと共にこき使われる。そして、休憩時間のたびに係りの兵隊に作業量の少なさを理由に怠け者だと罵倒される。徴用されてから7日目の午後、主人公はとうとう日射病にかかり倒れてしまう。

まア、係の兵隊の苦情はとも角として、腹が立ったのは、七日目の午後、日射病にかかって僕が倒れたときのことである。

「樹蔭へ入って休め」

と、兵隊は歯痒そうに言い、それから僕にあてつけるように、大声で怒鳴った。

「みんな明日から、頭を丸刈りにしてこい！ 髪の毛を長く伸ばしてるから、日射病になる！」

髪のを長くしていたのは、なにも僕ばかりではない。徴用組の殆どが、長い髪をしていた。それに、日射病になったのは、麦藁帽子が風で吹き飛んだせいなのだ。＜なにを言ってるやがる！＞僕は内心、憤慨した。(p.158) 5)

兵隊の不条理な言いがかりに憤慨を覚えた主人公は、日射病を口実に次の日から2日間作業に出なかった。しかし、最後の日に僅かな交通費が支給されると聞いた主人公が再び作業現場に出向いてみると、指揮を執っていた砲兵大尉が無断欠勤の届出を持ってくると命令する。しかも、その大尉は2時間以内に届出を提出するようにと命じたが、いくら考えても時間内に南山の山頂にある作業現場から西小門の病院まで診断書を取りに行ってくることは不可能であった。これは明らかな主人公に対するいじめであり、また他の人々への見せしめであった。そのことを周知であった主人公は、急ぎ足で山を下りて麓にある小さな病院に入り、事情を説明して診断書を書いてもらうことにする。結局、蒸し暑さに体力を奪われた主人公が再び山頂まで登り、診断書と共に無断欠勤の届出を提出したのは、惜しくも予定時間から5分遅れた時点であった。しかし、予想外に早い時間帯で診断書を取ってきた主人公を待ち受けていたのは次のような状況だった。

大尉は、診断書を覗き込み、それから僕の住所を聞いた。僕は用心深く、その診断書を書いたのは、かかりつけの医師だと説明した。

「ふむ、なかなか要領のいい奴だ」

と、相手は小さく舌打ちした。それから急に、僕の胸倉を掴んだ。

「貴様、この工合だと、病気ではなく、ずる休みだな？ 正直に言え！」(p.159)

この一件を契機に主人公は再び徴用されることを避けるために、総督府に勤める義兄を頼って、京畿道庁の総力第一課に就職する。

作品の中で主人公が再び軍人と対面するのは、上司である課長の代理として憲兵隊に赴く場面である。ある日、課長に呼び出された主人公は朝鮮人に対する創氏改名強要の是非に関して口論となる。そして、課長は始興郡のある面事務所から提出された一枚の書類を主人公に見せるのだが、そこにはある朝鮮人が創氏改名を申請した裕川仁という名前が記されていた。課長によると彼は恐れ多くも大元帥陛下の名前を使って皇室を侮辱しているという。そして、その朝鮮人が憲兵隊で尋問されているはずなので、参考人として主人公に出頭するよう命じる。課長の命令に従い憲兵隊へと赴くこととなった主人公は次のように語る。

5) 本稿における引用は特筆しない限り、全て梶山季之(1978)『李朝残影』(講談社文庫版)に所収された「旅譜」からとする。

返事をしながら、僕は憲兵たちの、手荒い訊問ぶりを思い描いていた。明治町の「ドミノ」の定連だった仲間を、貰い下げに行ったときの光景である。仲間は、半死半生の有様だった。ぐったり僕の肩に凭れかかり、血だらけで口も利けなかった。ただ喘ぎ喘ぎしていた。その息づかいが今でもハッキリ耳朶に残り、腫れ上がった顔は臉の裏にちらついている。

そのとき、憲兵たちは、思想が悪いからちよっぴりヤキを入れてやっただけさ、と威丈高に言った。そして僕の批難する視線を、傲慢にも撥ね付けた。……ヤキを入れる。それは退屈な憲兵たちの、遊戯であった。(pp.185-186)

主人公は過去の画家仲間を一種の遊戯として拷問にかけて痛めつけた憲兵たちの非人道的な暴力を想い浮かべ、おそらくこの朝鮮人も憲兵隊の中にある血生臭い訊問室でひどく撲られて気を失っているに違いないと想像する。

その後、作品の中で主人公はもう一度その悪しき憲兵隊に足を運ぶこととなる。親日家でありながらも創氏改名に協力しない水原郡の大地主・薛鎮英を脅迫するため、総力第一課の課長は彼の娘婿となるべき朝鮮人青年・金田北万を思想犯容疑をでっち上げて憲兵隊に拘束させたのである。そして、婚約者の安否を心配した薛鎮英の娘・玉順に頼まれた主人公は竜山駅前に建てられた長い赤煉瓦の堀に囲まれた兵營の一角に置かれた憲兵隊に一人で赴くこととなる。名刺を受け取り主人公が総力第一課の課員だとわかった憲兵は、脅迫の打ち合わせに来たものと勘違いして、薄気味悪い笑い声と共に次のように語る。

「いよいよ、思う壺ですな。明日はひとつ、その娘の前でいじめてやりましょう。なあに、わけはないです。朝鮮人という奴は、血が嫌いですからな。男に鼻血ぐらい出させれば、アイゴと卒倒しますぜ。お父さん、あの人を助けてあげて……てな都合で、わけもなく父親もコロリですよ」(p.199)

「明日は、薛鎮英も来るでしょう。今日、金田北万の父が迎えに行った筈です。たしかな身許引受人がおれば、帰してやると言ったのですよ。未来の妻の父なら、たしかな身許引受人だといってやったら、金田の父親は、わけもなく喜んでましたよ、ハハ……」(p.200)

憲兵のあまりにも破廉恥な態度に気分が悪くなった主人公は、何も言えずその場を離れようとした。そして、主人公は自分を部屋の外まで送ってきたこの憲兵の「浅黒い、軍人特有の皮膚の匂い」<sup>6)</sup>に吐き気を催す。

このように「族譜」における軍隊および軍人に対する描写は、勤労奉仕という名目において行われた強制徴用とその過程において繰り広げられた軍人たちの不条理な暴力、そして朝鮮人に対する日本憲兵たちの残酷な拷問と非人道的な言動が強調されている。これ

6) 梶山季之 (1978) 前掲書、p.200

らの描写から、作家である梶山季之が持つ軍隊および軍人に対する異常な反感と否定的な認識を推測することができる。実際、梶山季之は京城中学校に在学していた1944年に学徒動員として仁川陸軍造兵廠<sup>7)</sup>で歩兵銃の製造のため働かされた経験を持つ。この当時彼は、過酷な作業環境の中肺炎にかかり生死を彷徨うこともあったとされる。<sup>8)</sup> 幸い一命はとりとめたものの、この時の経験が彼に軍人と軍隊に対する嫌悪感をもたらした一つの契機となったことが推測できる。

### 3.2 植民地朝鮮の日本人官僚

次に「族譜」に描かれた植民地朝鮮の日本人官僚に対する描写を確認して見たい。前述したように作品の中で主人公は強制徴用から逃れるために京畿道庁の総力第一課で働くようになるのだが、その上司である課長との仲は非常に陰悪である。道庁に就職してから間もない頃、主人公は事務室の中で煙草を吹かしながら独り窓の外を眺める。外に見えるのは色あせた街路樹の間に聳え立つ、真っ白な壁の朝鮮総督府の建物と、その外壁に掲げられた「内鮮一体」と「一億一心」などの植民地支配と戦意高揚のためのスローガンであった。そのようなプロパガンダを呆れた表情でただ茫然と眺めている主人公を咎めるように、後ろから課長の呼び声がする。

僕は、名前を呼ばれて振り返った。課長の声には、咎めるような厳しさがある。課長は僕を嫌っていた。課員の誰もが、国民服で登庁しているのに、僕だけが何時までも親父譲りの背広姿で出勤しているのが、気に喰わないのだ。課員の誰かに、僕のことを非国民だと罵ったということも、耳にしていた。だが僕は、出世欲の塊りのような課長が、明治町のカフェーの女給を、こっそり妾に囲っているのを知っていた。(p.161)

植民地の支配者である日本人と同等の権利を与えるためという建前を掲げて、実際には拗れた日中戦争の戦局を打開するための手段として、異民族である朝鮮人たちを徴兵し戦場に送る込むための下準備に過ぎなかった創氏改名政策を、第一線で推進する課長の姿は、ここで出世欲と情欲にまみれた下劣な人間として描かれている。課長は主人公の担当地域である水原郡一帯の創氏改名率が低いことを口実に、普段から気に食わなかった主人公を懲らしめようとした。これに対して主人公は創氏改名はあくまでも朝鮮人の自発的意志で行われるべきだと主張するのだが、それを聞いた課長は「半ば強制せにゃア朝鮮人は躰いてこんのだ！君みたいに、ただ机に坐って面事務所にせさせと手紙かいてたって、創氏改名ができるかい！」<sup>9)</sup>と怒鳴る。この場面で課長は単に政策実施のためなら朝鮮人

7) 当時の仁川陸軍造兵廠への学徒動員に関してはキム・ミョン(2010)に詳しい。

8) 梶山美那江編(1998)「仕事の年譜・年譜の行間」、pp.14-15

9) 梶山季之(1978)前掲書、pp.162-163

の意思など無視できるという傲慢さをうかがわせるだけでなく、同じ日本人に対する蔑視的な態度をも合わせ持つ。課長のいう「君たち」とは、部下である課員たちを指しているのではなく、主人公のようないわゆる芸術家たちを指している。つまり、人間の条件としての自由な思考と熱烈な感情など植民地および戦争という規律と統制の時代には価値のないものだと蔑んでいる。また、前述した主人公が裕川仁と創氏改名を申請した朝鮮人のため憲兵隊に参考人として出席する場面においても、課長は下劣な人間としての一面を見せる。普段、朝鮮人には例外なく創氏改名を強制しろと主張する課長だが、同じ朝鮮人でありながらも皇族として創氏改名から外れた李王家に対しては不敬罪を理由に口を噤む。そして、本来ならば責任者として自ら憲兵隊に参考人として赴くべきところを、部下である主人公を代わりに送りながら次のように話す。

「そうだよ。憲兵隊にだ。裕川仁と改名した不屈者が、訊問にあつてる筈だ。参考人の呼び出しが来てる。課長は総督府へ会議で参っておりますので、私が代理で伺いました、と挨拶してな。私共は一向に存じませんでした、以後このような不祥事は起こさせません、と丁寧に謝ってくるんだ」 (p.185)

それこそ、上に弱く下に強い卑怯で狡猾な課長の性格が推測できる場面である。そして、このような性格の持ち主である課長は、最初は民族主義者で反日家だと決め付けていた薛鎮英が、親日家で大地主として朝鮮民衆に影響力の大きい人物だと知ると、今度は知事の権威を借りて彼を説得させ自分の体面を保とうと仕組む。

このように「族譜」の中には俗物で下劣な植民地朝鮮の日本人官僚の代表として造型された課長と共に、常に彼に付き添って機嫌を取りながら日和見主義で終始する係長の姿も描かれている。己の出世のために卑劣な手段を駆使して弱いものをいじめ課長に対して、自分の安泰のために課長の悪行から眼を背ける係長の態度は、末端官吏の典型的な姿かもしれない。しかし、課長の計画に加担したあげく、罪のない一人の朝鮮人を自殺に追い込み、そのことに激怒する主人公を眼の前にしてさえも、最後まで課長を庇護して自身の無事だけを望む係長の姿は、植民地朝鮮における悪しき傍観者の一人として読み取れる。

この他にも「族譜」には総督府の課長をしている主人公の義兄と賄賂を欲しがる郡庁の総務係長も登場する。先述の南山での徴用体験以後、主人公は義兄に頼んで今の仕事についている。一見、肉体労働に苦しんだ義理の弟に対する気遣いのように思われるが、さすがは総督府の課長にまで登りつめたエリート肌の人物だけあって、下宿も探さず自分の官舎に居候している主人公とはそれ以上の交際を拒む。彼が毎日迎えに来る官用車に一度も主人公を同乗させなかったことはその証である。また、作品の後半部で薛鎮英の自殺を知らせる玉順からの電報を主人公に渡しながらか、「六日に葬式を出すというのに、電報を寄越すなんて、人騒がせな奴だな」<sup>10)</sup>と笑いながら言う場面が登場し、彼の冷血

な一面が描かれる。

一方、作品の前半部で課長の命令を受けて薛鎮英の家を訪ね、彼に創氏改名を説得した主人公は、結局「薛」という苗字を日本風に読み替えることで妥協し、その申請書類を郡庁に提出しようとする。すると担当者である総務係長は次のような態度を見せる。

「なにしろ、薛鎮英は、このあたり切っただ地主ですからな。餅店から水原へ行くまで、他人の土地を通らずに行けるとい、大地主ですからな」

たしか相手は、そんな言葉を何度か繰返した。そうか。あれは暗に袖の下を仄めかす言葉だったのか。賄賂を持ってくれば、手加減をしてやるという意味だったのか……。僕は、自分の迂潤さに気づいた。(p.182)

そして、賄賂を納めなかったため薛鎮英の創氏改名はみごとに却下され、これはその後の薛一家を取り巻く悲劇を呼び寄せる一つの原因となる。

このように「族譜」における植民地朝鮮の日本人官僚に対する描写は、道庁という上級行政機関に勤務する官僚だけでなく、比較的朝鮮人と直接対面する機会も少なくないはずの郡庁の官吏までも、私利私欲に眼の眩んだ腐敗した存在として作品の中に描かれている。ただし、作品における主人公の父親同様、作家である梶山季之の父親も技術職ではあったものの植民地朝鮮における日本人官僚の一人であった事実は、前述した軍人と軍隊に対する否定的な描写に比べ、非常識で下劣な総力第一課長一人に対する攻撃的な描写が浮き立っている点はこの作品における特徴であり、また限界点でもあると指摘できる。

### 3.3 植民地朝鮮の朝鮮人

「族譜」の中には何人もの朝鮮人が登場するのだが、主人公である日本人青年と直接的な関わりを持つ朝鮮人である薛鎮英<sup>11)</sup>とその娘・玉順を除いて、他の朝鮮人登場人物たちに対する描写はそれほど多くない。まず、先述した裕川仁と創氏改名を申請して憲兵隊に連れて行かれ、酷い拷問を受ける朝鮮人男性、そして玉順の婚約者で濡れ衣を着せられ同じく憲兵隊で拷問された果てに、強制的に志願兵として訓練所に送られるセブランス医科大生の金田北万<sup>12)</sup>と、息子を捨てて族譜を選んだ薛鎮英と玉順を呪う全羅北道全州の名家である金田北万の家族たち<sup>13)</sup>、最後に創氏改名しなかった親日家の一例として名前のみ登場する全羅北道知事の孫永穆と慶尚北道知事の金大羽などが確認でき

10) 梶山季之 (1978) 前掲書、p.211

11) 薛鎮英のモデルに関してはいくつかの先行研究が存在するが、金英達 (1997) によると創氏改名を拒否して自殺した全羅北道の淳昌出身の南派・薛鎮永とされる。

12) 梶山季之 (1978) 前掲書、p.196・p.206

13) 梶山季之 (1978) 前掲書、p.203

る。他にも洗濯している田舎の農婦や後述する薛鎮英の家に居候する親戚などの朝鮮人も登場するが、薛鎮英・玉順親子に比べると作品の中での彼らに対する描写はあくまでも副次的なものに過ぎない。

それでは「族譜」において朝鮮人に対する描写の主眼をなす、薛鎮英と玉順親子について検討したい。作品の前半部において主人公は京城駅から列車に乗り、南にある餅店駅で降りて30分ほどポプラ並木の国道を歩き、薛鎮英の家に初めて着く。その家は部落の中央に建てられた広くて古めかしい屋敷であったのだが、主人公が近づいてみると母屋を取り囲むように建てられた列房と、門の中にある長煙管を咥えた白髯の老人たちの姿が眼に入る。そしてその朝鮮人の老人たちに対する描写が次のように続く。

老人たちは、客が入ってきたのを見ても、立膝の姿勢を崩さず、悠々と煙を吐き続けている。この国の風習で、富める親戚の家に、一族の縁故者が寄食するのであった。列房は、そのために建てられているのである。その我不関焉といった居候たちの態度は、僕には面白く、鄙びて感ぜられた。ここにだけは、戦争の風も吹き込んで来ないかのような、朝鮮らしい長閑さである。(p.172)

まだ伝統的な風習が残されていた植民地朝鮮において、大地主であり一族の当主である薛鎮英の家に多くの親戚たちが居候している状況は、それほど不自然なものではない。ただし、ここにおける一見長閑な風景としての描写の裏側には、時代に取り残されて無為徒食するばかりの朝鮮人像が横たわる。

家令に名刺を渡して母屋に案内された主人公はそこで薛鎮英と初体面する。彼は54-5歳くらいの円満な顔立ちと柔らかな物腰をとる温和な憎めない男で、それでいて如才なくなかなか社交的な人物として描写される。<sup>14)</sup>そして、主人公はそのような姿からこの中年の大地主が近隣の信望を集めていると納得する。また薛鎮英の隣には、人參茶を運んできた娘の玉順が座っている<sup>15)</sup>。彼女は今年の春に女学校を卒業し、日本語が流暢でない父親のために通訳の代わりとして同席している。<sup>16)</sup>

主人公が本格的に創氏改名の宣伝と勧誘を始めると、薛鎮英はその話にいちいち反論せず、ただししばしば頷きながら黙って聞いている。隣の玉順もまた茶色い瞳で熱弁する主人公を見つめながら清聴する。しかし、この二人が見せる静かで従順な姿勢は主人公にとっ

14) 梶山季之 (1978) 前掲書、p.173

15) 玉順の外見に対する描写は作品の中で具体的に記されないが、この作品の初稿である広島文学版の「族譜」によると、この時彼女は「水色の上衣に、藤紫の下裳」(p.254)を身につけていると描写される。なお、広島文学版と決定稿にあたる講談社文庫版との異同については崔俊鎬 (2015) に詳しい。

16) キム・ミョンスク (2015) によると、親日家の娘である玉順は当時日本人女性たちが通った高等女学校を卒業し、年齢は16-7歳くらいであることが想定できる。

てむしろ、今自分が熱く語っている創氏改名という政策の不条理さと無意味さに気付く要因となる。支離滅裂な説明をどうにか終えた主人公に対して薛鎮英は一抱えもある箱を持ってきて、その中から700年の一族の歴史が綴られた実物の族譜を取り出して目の前に並べる。この場面で薛鎮英は、創氏改名に対して単に感情的な言葉で反論するのではなく、実体としての族譜そのものを提示することで、積極的に自分の意思を伝えると共に、むしろ主人公に族譜が持つ歴史的な意義と伝統的な価値を認めさせようとする人物と描かれている。また、最初の創氏改名の申請が却下されて、3ヶ月後に再び創氏改名を頼むため主人公が訪ねてきた際も、薛鎮英はただ祖先に申し訳が立たないという感傷的な言葉だけに留まらず、薛氏一族の族譜は大学の教授も認めるくらい貴重な文献であるため、その教授の力を借りて行政側を説得したらどうか、実質的な解決策を提示して積極的に問題を解決しようとする人物として描写される。

作品の中盤部において、薛鎮英の創氏改名を圧迫するために総力第一課長は玉順は婦女子徴用工として仁川にある陸軍造兵廠で働かせる計画を立てる。幸い、事前にこの計画を偶然知ることとなった主人公によって、玉順は強制徴用から逃れることができる。しかし、この計画には玉順だけでなく周辺に暮らす小作農の娘たちをも強制徴用することになっていた。結果的に、玉順は難を逃れることができたが、薛氏一家の創氏改名問題のせいで罪のない小作農の娘たちが代わりに強制徴用されることとなる。この件に関して玉順は主人公に向かって次のように心情を語る。

ある日、彼女は就職のお礼を言いに来て、ちょっと皮肉のように僕に抗議した。玉順の話によると、幸い彼女だけは陸軍倉庫の事務員として就職しているので徴用を逃れたが、その他の娘たちは、造兵廠に送られ、粗末な宿舎と食事と被服だけを与えられて、馴れぬ仕事に油まみれになって働かせられている、ということであった。「病気になっても帰して貰えない」と、玉順は、自分だけが楽な仕事をしているのが、申し訳のないような口吻なのである。彼女には、自分の家の小作人の娘たちが、自分の父の犠牲になっていることが、よく判っていたのであろう。(p.206)

このような主人公に向けられた玉順の小作農の娘たちに対する心遣いと罪意識は、最終的には創氏改名を強制する朝鮮総督府とそれに関係する主人公をも含めたすべての日本人に対する間接的な抗議としても読み取れる。そもそも、初対面の時から玉順は主人公にとっては薛鎮英以上に気遣われる存在として描かれる。創氏改名を強要する立場の主人公に積極的な反発と抗議を見せることはないものの、常に彼女は主人公の心の片隅を占めて、彼の良心に被支配者としての朝鮮人の悲しみを訴えかける存在であった。作品の最後の部分で、父親の死を主人公に知らせるのも彼女であり、葬式のあと言い訳がましいことを並べ立てる主人公に対して、もうすべて遅いと激しい口調で吐き捨てるのも彼女である。こ

のような玉順の存在は、最後まで主人公を植民地統治が生み出した悲劇とその責任から逃れることを許さない。

このように作品の中で薛鎮英・玉順親子の存在は、創氏改名という非情な現実の中においても問題解決のために能動的に物事に介入していく、限られた状況下でも積極性を見せる人物として造型されており、このように二人の行動は作品全体を通して、ただ強制徴用を恐れて創氏改名の仕事に携わる主人公に、自身の自己正当化と利己主義の卑しさを反射させ、心理的な不安と自己嫌悪を引き起こす役割が持たされている。

### 3.4 植民地朝鮮の「僕」

最後に作品の主人公である「僕」に対する描写を確認してみたい。作品の中で「僕」という一人称語りとして登場する主人公の名前は谷六郎である。父親の職業は官吏で、一家は彼が5歳のとき京城に引っ越し、小学校から中学校3年生まで京城で暮らすこととなる。その後一家は再び内地にもどり、主人公は日本で美術学校<sup>17)</sup>に通うこととなる。しかし、朝鮮の風景を忘れられなかった彼は、先述の朝鮮総督府で勤務する義兄と姉家族を頼って、再び京城に舞い戻ってくる。<sup>18)</sup>京城に戻ってきた主人公は義兄の官舎に居候しながら、明治町にある「ドミノ」という酒場で若い画家たちとたむろする。ただし、いつも暇つぶしばかりしているわけではなく、ここ2-3年は朝鮮の風俗を描いて出品し、朝鮮美術展覧会で入選した経歴も持つ。このように植民地朝鮮で幼少年期を過ごし、成人した後も朝鮮が忘れられず再び戻ってきて、好きな朝鮮の風俗を描きながら暮らしてゆく主人公は、いわゆる植民二世の生き方を作品の中で体現している。しかし、先述した10日間の南山での強制労働の体験と、その後に徴用逃れのために働くこととなった京畿道庁の総力第一課での仕事を通して、主人公は植民地の現実と向き合うことを強いられる。それまで政治には関心がなく、そのため植民地朝鮮における日本人と朝鮮人の間に横たわる差別と抵抗の実態もよく知らなかった主人公は、自ら創氏改名という不条理な植民地政策を宣伝および実施する立場になって、ようやく植民地朝鮮の現状が眼に入ってくる。そもそも、総力第一課に勤め始めてまもない頃、主人公は創氏改名政策に対して次のような考えを持っていた。

ところが僕は、はじめのうち、この創氏改名政策に、そんな深い企みや魂胆が隠れているとは、全く気づいていなかったのだ。正直にいうと、この政策は、従来、不当に差別待遇されてきた朝鮮人への、一種の恩典であるとする考え、この仕事を与えられた時には、<こいつは高射砲陣地をつくらされるより、やり甲斐がある>と感激した位だったのである。(p.163)

17) 主人公が美術学校を卒業した画家という設定は、梶山季之のもう一つの代表的な朝鮮小説である「李朝残影」とも共通している。

18) 梶山季之 (1978) 前掲書、pp.163-164

5歳のときから朝鮮で暮らしていながらも、あくまでも日本人植民者の視座でしか植民地朝鮮を見つめることができない主人公は、帝国日本による植民地支配の実体を知らない人物として描写される。そして、そのような政治と歴史に無関心だった主人公は、創氏改名政策に携わることで、また薛鎮英という朝鮮人との出会いによって、日本による植民地支配の理不尽さと自らもその一翼を担う植民者であることを自覚する。

創氏改名を勧めるために薛鎮英の家を訪ねた主人公は、初体面の朝鮮人親子を前にして政策の意義を語るのだが、その際彼の口から出てきた言葉とは自分のものではなく、事前に準備された官製の宣伝文句であった。したがって、主人公は自らを「品質の悪い商品を売りこむ」「気の弱いセールスマン」<sup>19)</sup>として自虐的に形容する。また、創氏改名についての熱弁をふるえばふるうほど、主人公の心の底には深いひびが入り、やがて大きな亀裂となっていく。主人公にとって創氏改名を宣伝することは、まるで相手を納得させるためではなく、むしろ自分自身を納得させようと努力する、虚しい一人芝居にも似たものだったからである。

このように、作品の前半において主人公はいわゆる支配者側に安住していた植民者として描写され、植民地朝鮮を単に自らの原風景をなす懐かしい空間としてのみ認識している様子が提示される。そして、ただ強制徴用から逃れるために始めた、創氏改名の推進という仕事の歴史的な重みも考えず、薛鎮英という朝鮮人と直接体面してからようやく、日本による植民地支配に対して矛盾と疑念を持ち始める。作品の中で主人公のこのような自覚をもたらず引き金として族譜が用いられていることはいうまでもない。しかし、いくら植民地支配の実体に目覚めたとしても、強制徴用を恐れて今の仕事を辞めることができない主人公は、薛鎮英親子に対する同情と自己憐憫の間で葛藤する。このような主人公の曖昧な態度は薛鎮英の創氏改名を勧める過程においても顕在する。最初の訪問の際、祖先から受け継いだ苗字だけはどうしても捨てられないと主張する薛鎮英は、主人公に文字はそのままにして読み方だけを日本風に変えることを提案する。そして、その提案を引き受けた主人公は薛鎮英の代わりに郡庁へ申請の書類を提出する。この時、先述した通り郡庁の総務係長は賄賂を求めるのだが、後でそのことに気付いた主人公は上司の課長に賄賂を使うことで事態が解消されるかも知れないと考える。しかし、自分が賄賂を欲しがっていると勘違いされるのを恐れ、結局薛鎮英親子にその提案をしない。

くいい機会だ。あのことを彼女に話すべきだ、課長に賄賂を使って、工作すれば、或いは助かるかも知れないということ！>僕は、なんどもなんども、そう心に囁いた。そして事実、駅までの聞にきっかけを作ろうとした。しかし、玉順は黙り続けている。そのことを話すのは、苦痛だった。僕が賄賂を欲しがっているように、思われるのが嫌なのだ。(p.193)

19) 梶山季之 (1978) 前掲書、pp.174-175

表向きには理不尽な創氏改名を強られる薛鎮英親子に力を貸そうとする主人公だが、その心底にはあくまでも自分の日本人としての威厳と面目を優先する態度が読み取れる。創氏改名政策の虚偽性に対する自覚と、その強制に苦しめられる朝鮮人に対する同情によって、植民地支配の実体に近づき始めた主人公だが、自らの肉体的な保身と精神的な安息のために、どっちつかずの曖昧な態度を維持するばかりである。それゆえ、薛鎮英に対する二度目の創氏改名の勧誘が失敗した後、課長によってこの一件から外されたとき、主人公は「これ以上、薛鎮英に会わなくても済む」と考えて内心「ほっとしたような安堵」を覚える。しかしその安堵とは別に課長の顔から朝鮮人を撲りつける憲兵と同じ表情を読み取ると、「くろぐろとした危惧」を感じる。<sup>20)</sup>

主人公が担当から外された後も、課長と憲兵隊による薛鎮英への創氏改名強制の工作は続けられる。まず、玉順の婚約者が思想犯容疑で監禁されて拷問の末に志願兵訓練所に入れられ、その次は玉順を陸軍造兵廠へ強制徴用しようとする卑劣な計画が進行する。これらの工作が進行する間、主人公は玉順の代わりに憲兵隊へ行って婚約者の様子を探ったり、玉順本人の強制徴用を未然に防いだりするのだが、それらは次のような理由からである。

「僕が憲兵隊に行ってみましょう」

僕は、ポツンと言った。行ったところで、どうなるものでもない。だが玉順は自分の婚約者が拘引されたことが、創氏改名に関係があるのだと、女性らしい本能で嗅ぎとっているのだこのまま彼女を突き放すことは、僕まで疑われることになる。それは耐えられない屈辱だった。だから僕は、彼女のためというより、寧ろ僕のために憲兵隊へ行く気になったのである。(p.198)

しかし僕は、この第二次工作の被害を、未然に防いでやったことで、なにか胸に痞えていたものが、すうーと下りたような気持がしていた。造兵廠に送られた女子徴用工の中に、肝心の薛鎮英の娘が含まれていないと知ったときの、課長や係長の意外そうな顔。それを思い出しただけでも、僕はひそかに復讐を仕遂げたような快感を覚えるのだ。(pp.206-207)

このように主人公が玉順を助けるのは、あくまでも自分は善良な日本人で、課長や憲兵など悪しき日本人たちとは異なると主張し、または自分と対立関係にある彼ら日本人に個人的な復讐をするためであり、基本的には傍観者としての立場を崩さない。

結局、創氏改名を強制するため幼い孫たちにまで悪辣な虐めが繰り返されると、薛鎮英は自分以外の家族を「草壁」という日本姓に創氏改名の手続きをした後、当主としての責任を負って自殺する。玉順を強制徴用から救った後、特に薛鎮英親子から連絡もなく、またその年の夏には見事な果物などが贈られてきたので、主人公は「なんとかうまく納まってしまうのではないか」<sup>21)</sup>と呑気に考えていたのだが、植民地支配下の朝鮮人の境遇はそれほど

20) 梶山季之 (1978) 前掲書、p.194

甘いものではなかったのである。玉順から父親の死を知らされた主人公は、ようやく自らの保身と安息のために握り締めていた傍観者という名の命綱を切り捨て、名誉ある死を遂げた薛鎮英のことを「非国民」などと冒瀆する課長の前に立ちはだかり、次のような言葉を放つ。

僕はカアッと逆上せた。体が、怒りのために震えた。体の周回に、白熱性の閃光がひらめいたような気がした。思わず握りしめた拳が、激昂のためわなわなと戦いた。どうにも今の課長の言葉だけは、許せない気持がした。

「課長！今の言葉は、取り消して下さい。薛鎮英は、日本人の誰よりも、立派な人間です。少くとも、僕たちよりは」

感情が激してきて、声が次第に大きくなっていくのを、どうしても僕は抑えられなかった。

(pp.213-214)

ここで主人公は課長を責めながらも、自分自身も同じくいわゆる悪しき日本人の一員であることを自認している。先述したとおり、主人公は葬式に参加し、婚約者も父親も失った玉順に言い訳にも似た慰めの言葉を伝えようとするのだが、彼女から冷たく拒否される。それから3ヶ月後、大東亜戦争が始まり赤紙をもらった主人公は、「どこか贖罪に似た、寧ろ晴々とした気持ちすら」<sup>22)</sup>感じながら、寂しく独りで出征列車に乗って戦地に向かう。

このように作品の中で主人公である「僕」は、作品の前半部において植民二世として育ち、植民地朝鮮における日本人と朝鮮人の間に横たわる支配と被支配の構造に関心を持たず、ただ己の植民者としての地位を謳歌して過ごした人物として描写される。それが、徴用逃れのために携わることとなった創氏改名という植民地政策の実体と、それによって苦しめられる朝鮮人に出会い、帝国日本による植民地支配の理不尽さと暴力性に目覚めることとなる。しかし、自分の保身のため仕事をやめることも、また積極的に朝鮮人を助けることもせず、ただ傍観者としての立場を貫こうとするが、一人の朝鮮人の死によってその卑怯さを思い知らされる存在として描写されている。

#### 4. まとめ

作品「族譜」は梶山季之の植民地朝鮮をテーマにした代表作の一つである。創氏改名という歴史的な事実に基づいて、植民地朝鮮の日本人青年と朝鮮人親子を中心軸に据え、彼らの苦悩と葛藤、そして死を描いている。本稿ではこの作品に登場する様々な人

21) 梶山季之 (1978) 前掲書、p.211

22) 梶山季之 (1978) 前掲書、p.221

物に対する描写を中心に、作家の植民地朝鮮に対する認識を考察してみた。これまでの分析内容を整理すると次のようになる。

まず、植民地朝鮮における日本人軍人と官僚に対する積極的な批判をもって、植民地朝鮮支配の不当性を浮き彫りにしている。その上、本論でも指摘したとおり、実際作家の父親が植民地朝鮮の日本人官僚であったにもかかわらず、作品の中で悪辣で卑劣な日本人官僚が登場しているのは、作家がかなり客観的な立場で当時の植民地朝鮮の状況を作品内に反映しようと努めたものとして評価できる。ただし、軍や官僚と共に当時の植民地朝鮮における権力層であった教師や商人など他の日本人植民者の登場人物たちがもっと積極的に提示されなかったことは惜まれる。次に、創氏改名政策によって苦しめられる朝鮮人に対する描写と、これに能動的に対処する朝鮮人の姿を描いており、植民地支配下の朝鮮人たちの抵抗精神を浮き彫りにしている点は注目に値する。植民地朝鮮の朝鮮人たちを単に受動的で消極的な被害者像として提示するのではなく、日本の植民地支配に苦しめられながらも、朝鮮人なりの生存方法を探るために積極的に行動し、また時には民族の伝統を守り抜くために闘争する能動的な姿で描いている点は特筆すべきである。ただし、あまりにも薛鎮英親子に重点が置かれすぎて、他の朝鮮人に対する描写は単調で皮相的になんている感は否めない。最後に主人公に対する描写を通して、日本の植民地支配によって朝鮮人が蒙った差別と蔑視に対して無知な日本人植民者の姿と、日本による植民地支配の不当さを知りながらも、これに手を拱いている日本人の姿を描くことで、当時の日本人植民者と現在の日本社会を同時に批判している。ただし、創氏改名をめぐる朝鮮人の苦悩と苦痛を作品内で直接的に提示していくべきである主人公が、作品の中盤以降から事態から一步離れたところでその後の物語を語っていく展開方式は、読者に対して作品への集中と緊張を弛緩させる結果を招いている。

梶山季之は植民地時代にまだ未成年者であった。一方、「族譜」の主人公は成人である。作家は自分が植民地時代にもし大人であったならば、そして作品の主人公と同じ立場に置かれていたとしたら、自分はどのような行動を取るであろうかを、この作品の全体を通して描いたと思われる。作品の中盤部において下劣な課長と暴力的な憲兵隊、虐げられる薛鎮英親子の構図が定立し、この状況を一步離れた場所から歯がゆい思いで助けようとする主人公の姿が描かれる。すなわち、悪しき日本人と哀れな朝鮮人の二項対立構図に、もう一つ善良なる日本人としての主人公の姿、つまり作家自らが理想とする植民地日本人の姿をオーバーラップさせているのだといえよう。これは作家の植民地朝鮮に対する適えられない欲望と未練の裏返しとしても読み取ることができる。

## 【参考文献】

- カン・ジング (2006) 「전후 일본 문학에 나타난 한국의 표상 체계 연구 II - 가지야마 토시유키(梶山季之) 문학에 나타난 한국의 이미지-」 『민족문학사연구』 제30호, 민족문학사학회, pp.351-380
- 김·뮌스크 (2015) 「일제 강점기 조선인 여학교와 재조선 일본인 여학교의 특성 비교 연구 -동덕,수원고녀 학적부를 중심으로-」 『한국사상과 문화』 75권, 한국사상문화학회, pp.103-134
- 김·미hyon (2010) 「전시체제기 인천지역 학생 노동력 동원」 『인천학연구』 제12권, 인천대학교 인천학연구원, pp.139-182
- 박·젠히, 김·스즈요 (2009) 「'족보'와 '창씨개명」 『日本文化學報』 제42집, 한국일본문화학회, pp.141-163
- 崔俊鎬 (2015) 「梶山季之의 「朝鮮小説」論—「族譜」의改稿内容を中心に—」 『비교일본학』 제34집, 한양대학교 일본학국제비교연구소, pp.311-328
- 梶山季之 (1978) 「族譜」 『李朝殘影』 講談社, pp.155-222
- 梶山季之 (2002) 「族譜 (広島文学版)」 『李朝殘影—梶山季之小説集』 川村湊編, インパクト出版会, pp.250-266
- 梶山美那江編 (1998) 「仕事の年譜・年譜の行間」 『梶山季之一その軌跡と周辺 積乱雲』 季節社, pp.13-264
- 川村湊編 (2002) 「梶山季之の「朝鮮小説」の世界」 『李朝殘影—梶山季之小説集』 インパクト出版会, pp.312-362
- 金英達 (1997) 「薛鎭永, 最後の義兵鬪争—創氏改名に死をもって抗議」 『創氏改名の研究』 未来社, pp.127-143
- 坂田稔 (1998) 「戦後文学の座標と形成」 『梶山季之一その軌跡と周辺 積乱雲』 梶山美那江編, pp.315-321

|                        |
|------------------------|
| 투 고 일 : 2015. 8. 31    |
| 심 사 일 : 2015. 9. 12    |
| 게 제 확 정 일 : 2015.10. 3 |